

2013 年 01 月 17 日

佐藤香先生お別れの会

新年に改まりました。

今年も変わらず邁進してゆきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

劇団結成当初から長くご支援をいただいていた佐藤香先生が、元旦に89歳で亡くなられたという知らせが入りました。もうすぐ90歳になるというお歳でした。

「香(かおる)先生」と敬愛を込めて呼ぶ劇団員を長い間見守ってくださっていた存在でした。

香先生は、前橋協立病院を設立した故佐藤正二先生の夫人であり、日本に原発が増設されていった時代に反核の‘市民科学者’として真っ向から立ち向う反対運動を起こし、生涯その活動に尽力した高木仁三郎さんのお姉さんでもありました。

壮年期の、痩身に白衣をまとい颯爽と病院内を歩く姿に、多くの人が魅了されたそうです。

数年前まで前橋コスモス内科医院の医師として診察にあたり、劇団員も度々お世話になっていました。

香先生は、弟の高木仁三郎さんに先立たれてからは、毎年しのぶ会を催し、高木さんのご友人を招いての講演など、社会問題を自ら学び、またひとつとに伝えることに精力を注ぎ続けておられました。

また、芸術に造詣深く、特にロシアの文化や音楽を愛され、病院内のホールで音楽コンサートを度々催されたり、お元気なころには劇団の公演にも診療時間の合間をぬって駆けつけてくださいました。

香先生のご遺族が開いたお別れの会が1月13日にあると聞き、ご友人や先生を慕っていた多くの患者さんと共に、劇団員も参列しました。

献花だけの、そしてご家族ご友人のことばと、音楽の演奏によるお別れの会でした。

前橋市文京町にあるコスモス医院は、「コスモス内科皮膚科」として香先生のお孫さん夫妻が継ぎ、地域医療の場として継続しています。

佐藤香先生、長い間ご苦労様でした。

信念を貫き、人への愛にあふれた私たちの良き人生の先輩として、常に変わず存在してくださったことに深く感謝と敬意の念を表します。

ありがとうございました。

劇団群馬中芸 一同



会場に置かれた香先生の写真

2013 年 05 月 25 日

創立50周年記念の集い

新年度も早ふた月が過ぎ、おしめりの予感に庭先のあまがえるがここぞと声を張りあげ鳴く季節になりました。劇団は細々とではありますが、公演活動が続ける日々です。

5月5日に「劇団創立50周年記念の集い」を未来スタジオで行いました。

いつもなら大型連休中のこどもの日、劇団の上演作品を‘春のこども劇場’でお楽しみいただく機会でしたが、今年は記念の集いを開催することになりました。

いつも力不足な劇団が50年の節目をみな様にご報告して共に祝っていただくということに、萎縮する思いばかりが先にあり、準備の間も不安にかられてばかりでしたが、当日は思いもかけず、参会者の方々のあたたかいことばをたくさんいただき、私たちにとって幸福なひとときの集いとなりました。

劇団ホームページの公演情報ページ(「これまでの公演」2013 年 5 月 5 日)で、劇団代表のお礼ご挨拶を載せております。

ご参会くださったみな様、誠にありがとうございました。ブログ上でも重ねて御礼申し上げます。

当日の様子を写真紹介します。



はじめに代表の石川が劇団の50年のあゆみをお話しました。

記念パンフレットにまとめた年譜にそいながら、簡略には語れない思いのこもった長いものになりました。

ようやく乾杯！

長年お世話になっている石橋先生に乾杯の音頭をとっていただきました。



そして、テーブルに並んだたくさんのご馳走！を歓談しながらいただいていると、ステージになにやら19世紀の身なりをした紳士風の男がおもむろに現れて、、、
劇団50周年記念作品、一人芝居「タバコの害について」が始まりました。



演者は秋山としひと。

演出に叱咤され、団員に激励(?)されながら、このふた月稽古を重ねる間、当人はかなり苦戦していました。

総稽古になる前からかなりあがってしまった様で、その緊張とモノローグという重圧と長ぜりふの「試練」は、大変なものだったようです。

とはいえ、そんな当人の内情など知る由もない観客のみなさんには、わりあい楽しんでいただけたようです。

ニューヒンという登場人物の状況と、演じる役者の置かれている状況が一体化していて、どこからどこまでが演技なのかそうでないのか分からない、妙な真実味が醸し出されていたようです。

「ええ、わたくしはひどく緊張してまして、、、」



稽古中はただ空間に向けて(演出やスタッフはいますが)発していたことばが、本番では会場に集うお客さんに向かって届き、受け手側の反応で劇が息づいていくのが醍醐味ですが、、、
この日、緊張のあまりモノローグ前半の一部分そっくり抜けてしまったことが、私たちとしては惜しかったです、、、。

そしてこの後、会場に集うみなさんのお話や音楽や祝い唄、むかしがたりや腹話術まで多彩な出し物やスピーチで、このささやかな祝賀会が人々と文化の集う交流の場にひとときなるよう、みなさんが共につくりあげてくださったのでした。

ご多忙な中、ふじたあさやさんがかけつけてくださいました。



「演劇の害について」を話しますと、劇団創立時の指導者故・風見鶏介先生に「これからは地域劇団をつくらなきゃ、あさや君。群馬中芸を頼むよ」と言われたという当時の思い出や、「演劇を手段にしているうちは害はないのだが、演劇を生き方にしてしまうと少しでも楽をしたいという世の中ではてきめんに害になる、群馬中芸は害そのもの」、同年齢で仲間の劇団元代表・中村欽一さんに「この人はブレないんだ。欽ちゃん、おつかれさま！」とエールを送っていただきました。



江東区の劇団石るつの境野修次さん。
全日本リアリズム演劇会議の「演劇会議」という冊子の編集長もしておられます。

劇団えるむの佐藤嘉一さん。

お若い頃、いずみ座という劇団の演出部で風見さんに指導をうけましたというお話でした。中芸とは兄弟劇団のような関係ですとおっしゃっていただきました。



腹話術で彩りをそえてくださった京浜協同劇団の城谷護さん。
二階席で大人の話辛抱して聞いてくれた子どもたちがとても楽しそうに笑っていました。



丸山亜季先生と自由大学の音楽科のみなさん。
中芸の作品を取り上げて、みなさんで歌ってくれました。



体調をおして出席してくださった詩人の久保田穰さん。
「演劇会議」に寄稿した『現代の民話創造の前衛—中村欽一—』
という評を会場のみなさんに配布して、それを読んでくださいました。

吾妻郡旧六合村で長年教職をされていた山本茂さん。
劇団作品「また七ぎつねは自転車にのって」や
「ゆめみこぞう」は六合の民話が基になっています。
今日は六合の「むかし」から「さる地蔵」をかたる
「おじい」になってくれました。



いなほ保育園のキンタさん。

おおらかに九州高千穂地方の民謡『刈干切唄』で祝ってくれました。



この後もたくさんの方々がスピーチや音楽、歌を披露してくださいました。

未来スタジオという劇場を維持する大変さを伝えて下さった市議の長谷川薫さん、県議の酒井宏明さん、高崎演劇鑑賞会で長年中芸の劇を取り上げていただいた高井高さん、地域合同公演「ガダ・メイリン」の主演をつとめた黒沢功さん、劇団本拠地の富士見町内で長くお世話になっている下田嘉丈さんの素敵なハーモニカや、劇団の古い仲間の中林三恵さんの自作「赤い花白い花」の歌では、会場全体がひとつになりました。さらに前橋おやこ劇場の峯岸赫子さん、福島の支援活動を拓げる丹治杉江さん、野口体操の大井弘子さん、日本舞踊の若柳久子さんなどが話ししてくださって、今日の参会者のみなさんのご紹介などで予定時間は大いにのびていきました。

そして、いなほ保育園の北原和子さんからは、励ましのことばと花束をいただきました。



劇団の元代表・座付作者・演出の中村欽一さんが最後に話し、代表のお礼のことばで祝賀会はお開きになりました。

当初「軽食をご用意します」とお知らせした祝賀会のお料理は、いつもいつもお世話になり続けている桶川市のいなほ保育園学童のお母さんたちが作っていただきました。

当日の早朝遠方からお料理や材料を運んで、みなさんで手際よくお皿にいくつも盛りつけて用意してくださいました。



とてもおいしい、こころづくしのご馳走で、このたびもご支援をいただきました。

宴会後の後片付けからなにまで、毎回お世話になってしまいます。

また、当日劇団のお手伝いをしてくださったみなさんにも、こころより感謝申し上げます。



ロビーには匂い立つ祝いの花々が立ち並びました。

みなさんのおかげでいい50年の節目となることができました。本当にありがとうございました。

(写真撮影:新井忠)

※モノローグ幕「タバコの害について」 A・チェーホフ 作 /中村 欽一 演出

1962年の劇団設立当時に上演した『チェーホフ劇場』のボードビルの一つ。

あらすじ

ニューヒンは家内の命令で煙草の害について講演をしなければならなくなった。

勇ましく登場してきた彼は、煙草のことについて話し始めたが、もともとそんな話が出るはずがない。

話の内容はいつのまにやら家内のこと家族のこと自分の生活のこと等、常日頃から面白くなく感じていた問題に進んでゆく。終りの時間は迫ってくるし家内もそろそろあらわれる頃だ……。

2013 年 09 月 02 日

いなほ保育園の夏祭り

8月31日、いつもお世話になっている桶川市のいなほ保育園の夏祭りに出かけました。
毎年8月最後の休日に行われる夏祭りです。

群馬中芸は、時に照明のお手伝いなどをしていましたが、近年はただ楽しみによらせていただくという機会が多くなりました。

近頃ではなかなか見られなくなった夏の終わりの夜まつりです。

夕方、日が暮れ始めると、地元のお囃子連のみなさんの調べの中、保育園のこどもや大人たちがひらく露店のひろばが賑わっていきます。手づくりのおいしい多彩な食べもの、かき氷やビール、鮎の塩焼きなどを食べながら、思い思いに楽しんでいます。

やがて照明が落とされ、保育園全体が暗闇に包まれると、しずかな歌声の中、遠くの方からこどもたちがしずしずと灯籠を手に一列になって歩いてきて、中央の段々になった棚に灯籠が立ち並んでいきます。
たくさんのあかりが辺りを柔らかく照らし出します。

先祖の霊、亡くなった人々の魂を見送るための厳かな静寂が一時おとずれました。

そして、園長の北原さんを先頭に、学童の女の子たちが自分で縫い、模様を描いた浴衣に編み笠を被り、たおやかに舞い踊ると、小さなこどもたちは躍動的な保育士の動きに合わせて、浴衣をひらひらさせながら舞を舞っていました。

学童の男の子たちのリードに合わせて、こどもたちだけで連打する太鼓の音が軽やかに響き渡ると、いっせいに歓声が上がりました。

幻想的な園庭が熱気に包まれてくると、神輿が担がれわっしょい！わっしょい！
音頭に合わせて大人もこどもも飛び跳ねて、夏の終わりを熱狂して打ち上げます。
さいごは花火師さんによる本場の花火がひろばの真上に上がり、みんなで見上げました。

いなほ保育園の夏祭りは、初めてでも、何度訪れても、忘れていた懐かしい記憶に
出会えるような原風景です。

直前までの準備は大人もこどももたいへんなものですが、祭りのあとは、ゆったりと心地よくやさしい時間がいつまでも余韻として続いていました。



2013 年 09 月 07 日

カエルの豆太 青森・岩手公演

温帯低気圧の影響を心配しながら、劇団の舞台班は9月2日から三日間、みちのくは青森(9月3日)、そして花巻(9月4日)へと「カエルの豆太」公演へ出掛けました。

いつもお世話になっている青森市のまきば保育園、そして劇中音楽を通してカエルの豆太に興味を持っていた岩手の花巻・太陽の子保育園が、群馬中芸を呼んでくださいました。



乗り日は事前の会場準備でした。出演者の稽古前の様子。奥に見えるブルーTシャツの人が変なポーズ。



豆太役の元気印お姉さん「やよびい」です。いつもこんな感じです。

豊かな緑に囲まれた、まきば保育園のみなさんとは3年ぶりの再会でした。今回は、交流のある保育園も一緒に観劇、園のホールはこどもたちでいっぱいになりました。

きちんと正座をして、どの子も真剣に劇を見てくれています。その集中力の高さに驚かされます。

劇の後半、ウシガエルのホーおばさんが、豆太にこの世の生きものは生きているからこそみんな‘変化’していくのだということを語る場面になっても、じっと劇に集中しているこどもたちに感銘を受けました。

正座は背筋が伸び、こどもたちの身体のバランスが保たれるいい座り方なのだそうです。

最後までしっかり劇をみてくれていました。



劇が終わったあとのこどもたち

おおらかで穏やかな人柄の園長の山口さんや、職員のみなさんのあたたかさに再びふれることが出来た嬉しさに後ろ髪引かれながら、今回は旅程のためゆっくり交流することが出来ず、お昼をごちそうになった後すぐに保育園を出発しなければなりませんでした。

とても残念でしたが、お土産に香しいりんごとジュース、津軽塗の箸、自家製蜂蜜をいただき、心よりお礼を申しあげて園を後にしました。

午後から東北自動車道を南下し、岩手県へと向かいます。

岩手県花巻市の太陽の子保育園に伺うのは初めてでした。



花巻の市街地にある保育園の外観。

おお、二階！ということで、劇の「仕込み」は若干覚悟がいますが、許可をいただいて園庭のフェンスを一部外し、そこからトラックを道路に横着けて、えんやこらと舞台を運び入れました。



心配していた会場条件も問題なく設営することが出来、舞台セットとホール空間がピタリとはまったように劇場空間をつくることができました。

その日の宿泊先、花巻台温泉には園長の瀬川さんが道案内してくださって、夜7時ごろには「福寿館」という旅館に到着することができました。台温泉は花巻温泉郷の源泉にあたる弱硫黄泉で、深山に囲まれた通りには温泉宿が立ち並んでいました。

旅館での夕食は山里料理で、川魚がおいしかったです。



翌朝の旅館前。
さて行きますかと舞台班一名写る。

保育園での公演は上演時間が早く、今日は午前10時30分開演予定でした。

太陽の子保育園も昨日のように交流保育園のみなさんが一緒に参加していました。

宮城県から来られた錦保育園は、劇団員の太一という俳優が育った保育園で、園長の一村さんとも旧知の関係です。終演後には一村さんが本人をみなさんに紹介していました。

今日もたくさんの子どもたちが、真剣なまなざしで劇を観てくれていました。

バラシを手伝っていただいたり、お屋をごちそうになったり、お花や手土産を頂いたり、瀬川先生はじめ保育園のみなさんのあたたかな心遣いに感謝しながら、撤収の終わった午後、お礼を申しあげて花巻市を出発、帰路へとつきました。

後日いただいた団子や餅菓子は味わい深くておいしいものでした。

『カエルの豆太』は、‘音楽教育の会’を通じて全国から度々問い合わせをいただく舞台です。

常時上演可能な作品ではないのですが、「♪いざ ゆけ 仲間たち！」というテンポの良い劇中歌が、全国のみなさんに歌われ続けていることで、今回のような公演日程を単発的に組むことが出来ると、全国へと赴いて地域のみなさんとふれあうことの出来るまたとない機会が生まれます。

肉体疲労はしても、劇団・俳優冥利につける幸福な体験をさせてもらっています。

舞台上での課題はありますが、これからもよりよい舞台に向けて励んでゆきたいと思います。

お世話になりましたみなさん、ありがとうございました。

2013 年 09 月 19 日

あかぎ未来スタジオ「秋の劇場」**「カエルの豆太」**公演

あかぎ未来スタジオ企画「カエルの豆太」公演が9月16日、17日の日程を無事(?)終えました。

16日の敬老の日は、ご存知のように全国を席卷した台風18号のおかげで大荒れの天気となってしまいました！

明け方から暴風域になった前橋。劇団も早朝までに公演を中止するかどうかの判断に迫られました。

公演を楽しみにしてくださっているお客さんが一人でもいる以上、劇団は予定通り決行することにしました。

吹きつける風雨のなか、スタジオへと向かう道中の空は猛スピードで雲が流れてゆき、「そらはへんにあかるいのだ」という宮沢賢治のことばのようです。

築25年の未来スタジオは、嵐のおかげで屋根の内側が一部剥がれ落ちていたり、防災窓が強風で夜のうちに開いてしまい、雨の吹きこんだ東側のロビーが水浸しになっていたり、団員は集合早々大忙しで補修整備に取りかかりました。

その後、演出を迎えての通し稽古で舞台の感覚をつかみ、出演者たちは控室に入って本番に備えました。

とはいえ嵐は一向に弱まらないのでした。

そんな非常事態の中にもかかわらず、スタジオへ足を運んでくださるお客さんはいらっしゃいました！

早くからチケットの予約を頂いていた富士見市のこばと保育園のみなさんは、嵐が一番激しい時間帯に予定通りやって来てくれました。

劇中歌が音楽リズムで歌われていることで、舞台「カエルの豆太」に興味を持っていただき、群馬県への職員旅行の道中立ち寄ってくださったのでした。

今日は公演をしますかという問い合わせや、残念ながら行けそうにありませんという電話をいただいたりと、要望の多かった「カエルの豆太」を本拠地で上演する数少ない機会を楽しみにしてくださっている方がいることはとてもありがたいことです。そして公演の初日はあいにくの天気になってしまい本当に残念でした。

今回の劇場公演は、あかぎ未来スタジオ25周年を祝う公演ということで、「富士見ハーモニカ教室」の下田ご夫妻と仲間のみなさんがハーモニカ演奏で共演してくださいました。

「カエルの豆太」の終演後、みなさんが舞台に登場し、緋色のベストで揃いの姿、なつかしくやさしい調べや流行歌を披露してくださいました。建物の外は台風の真っ只中、ごうごう唸る音が楽器のやさしい音色をからめとってしまいそうでしたが、演奏する側も聴く側もこころを込めてその場の時を過ごしました。

敬老の日の午前、午後の二回公演はようやく通り過ぎて行った台風の残り風のなか、なんとか一日目を終えました。



このような日に遠くからおいでいただいたり、いつもかけつけてくださる方々や、劇団員の家族、友人知人のみなさんが未来スタジオに集まってくださったことは、とても嬉しくありがたいことでした。

公演二日目は晴々とした爽やかな青空の下、保育園のこどもたちと職員さんが、バスで県内の各地からやって来てくれたり、一般のお客様や日頃お世話になっている方々もおいでくださいました。

この日も遠くは相模原から演劇を学んでいる青年が夜通しかけてスタジオへやってきてくれて、私たちよりも早く到着して芝居を待っていてくれました。



豆太の歌が保育園で歌われているので、すっかりおなじみになっているこどもたちは楽しそうに観てくれます。そういう会場の雰囲気は出演する側にもうれしいことです。笑い声や歓声に包まれながらの舞台でした。終演後、劇中の歌をこどもたちと一緒に歌うと、元気な声がホール中に響きました。



ロビーでは、群馬大学で長年教鞭をとられていた富沢秀文さんという方の「斜交式組紙」という色紙を綾織りしたようなユニークな作品をお借りして、展示していました。

みなさんのご厚意に支えられて、劇団にとっての9月公演、未来スタジオ祝25周年の記念公演が、何はともあれ幸い大きな事故や問題もなく二日間の日程を終えることが出来ましたことを、関係者一同ほっと胸をなでおろしているところです。

劇場へご来場いただいたみなさん、台風の中駐車場や受付をお手伝いしてくださったみなさん、どうもありがとうございました。こころより感謝の意と御礼を申しあげます。

秋の芸術鑑賞の時期になり、各地域でも色々な文化行事やスポーツ大会・運動会などが活発に行われる季節になります。

劇団もこの9月公演を励みにして、公演活動をつづけてゆきます。

2013 年 10 月 11 日

木鶏の会 小田暁夫さんのお話「日米安保条約と集団的自衛権」

知的文化交流の場、木鶏の会の例会が10月6日に未来スタジオでありました。

木鶏の会はこれまでに二度劇団ブログでも紹介しましたが、毎回貴重なお話を聞くことのできる良い例会になるのに、ブログ筆者がなまけているため、報告出来ずじまいの例会が多々あります。

今年は5月に佐久総合病院の故若月俊一医師の農村医療記録ドキュメンタリー「医(いや)す者として」をとりあげて上映会を行いました。

医療・福祉に携わる方々も参加してくださって、地域医療の原点となった佐久総合病院と今の医療現場のあり方について、身近な問題としてみなさんで感想を出し合う例会となりました。

そして、今回の例会は、元高校教諭で群馬平和委員会会長の小田暁夫さんに「日米安保条約と集団的自衛権」について、話していただきました。



小さな集まりの勉強会なので講師の方には申し訳ないのですが、その分じっくりとお話を聞くことができます。

日本の外交問題は簡単にまとめることが出来ない話題ですし、ブログ筆者にはその力がありませんので、頂いた小田先生のレジメ資料から、印象に残ったことを少しご紹介して及第しようと思います。

○集団的自衛権という言葉はいつごろ生まれたのか

1945年、第二次世界大戦後の国際平和維持のため国際連合が発足。

その規約である国連憲章を審議している最終段階で、アメリカが強引に修正を加えたのが「集団的」という言葉。当時アメリカは南米諸国と軍事同盟を結んでいたため、自衛権ではなく「集団的自衛権」にする必要があった。

○国連憲章ではどう規定している？

すべての加盟国の、『武力による威嚇または武力の行使』は『慎まなければならない。』

平和が脅かされるとき、安保理が軍事措置を決定する。

それまでの間の、『個別的、集団的自衛権の行使』は認められている。

「集団的自衛権は審議の段階で『発明』された…軍事同盟を前提とした概念」(川村俊夫／憲法会議・九条の回事務局)。

○サンフランシスコ平和条約とともに結ばれた日米安保条約の実体

1951年9月8日、日本と48カ国間でサンフランシスコ平和条約を結び、日本は国権を回復、国際復帰する。
同時にアメリカとの間で日米安全保障条約を結ぶ。

「我々の望む軍隊を望む場所に望む期間おくこと」(米国務長官ダレス発言)

吉田茂首相だけが条約の不平等さを知っていた。

グアム、プエルトリコと同じアメリカとの「属国条約」である。

○歴代政府の集団的自衛権解釈

日本が武力攻撃を受けていない以上「他国に加えられた武力攻撃を阻止するための集団的自衛権の行使は憲法上許されない」

「日本は主権国家である以上、集団的自衛権を有しているが、憲法九条のもとでは行使できない」

「集団的自衛権行使で、日本は安保条約での双務性を実現し、米国と対等になる」(安倍晋三)

* 双務性って？—いざという時、米軍は日本を守るだろうが自衛隊はそれをしない。

それは片務的で、『イコールパートナー』とはいえない。『安保ただのり論』という解釈からくる。

○日本に集団的自衛権をせまってきたのはアメリカ

2000年10月 憲法を改正し、同盟をイギリス並の同盟へ。(R・アーミテージ／軍人・政治家)

2001年9月 「ショウザフラッグ」 →海上自衛隊、インド洋で米軍艦へ燃料補給。

2002年10月 「ブーツ オンザグラウンド」(ローレンス国防次官補代理)
日本政府 ‘テロ対策特別措置法’ ‘イラク特別措置法’ 制定。
→陸上自衛隊をイラクへ派遣、「後方支援」。

* 小泉純一郎発言 「日米関係が緊密であればあるほど中国、韓国、アジア諸国との関係にも資するものである。」

* 安倍晋三発言 「日米関係が強固になればなるほど、極東アジア情勢の安定が高まる。」

アメリカの「ジャパンハンドラーズ」(日本通)といわれる政治家の公式・非公式な発言要求に応え続ける日本。
日本政府はアメリカの‘極右’とばかり親交しているが、それは米国内の多数派ではない。

○『アジアの孤児』になりつつある日本

欧州連合・アメリカは武力によらない統治へと向かっていることを察知しない日本政府。

「日本はアメリカの全世界展開の最重要戦略拠点。アメリカは日本を必要としているのに日本には必要ない。
日本は初めてアメリカとの対等な立場にたてる安全保障戦略環境にある。」(故・江畑謙介／軍事評論家)

「アメリカの目標は財政再建と輸出倍増。そのため中国をだきこむ……集団的自衛権は中国の猜疑心を招きかねない。アメリカにとって集団的自衛権はもはや無意味……日本に冷淡な態度を示さざるをえない。」

(田岡元朝日新聞編集員)

○日本とアジアの平和と友好のためには何が大切か

国連憲章と日本国憲法の原理と精神に立ち返ること。

東南アジア友好協力条約(TAC)は「集団的」安全保障であり、戦争放棄を掲げている。

東南アジア地域上に限定した平和条約だが、日・中・韓国、ロシア、インド、近年は欧州連合、アメリカも加盟し、世界に広がっている。これを有効化していくこと。

日米安保条約は日本が望めばいつでも破棄できる条約。

軍事同盟である安保条約を廃止してこそ、真の平和外交が築ける。

他国の上空を飛行訓練する米軍は、自国内では決してできない。

1977年の横浜米軍機墜落事件は、一般市民の幼児二人と母親が犠牲になった。(「パパママバイバイ事件」)

自衛隊は米軍機パイロットを保護輸送しただけだったという事実が、日米安保条約の実態。



小田先生はゆっくりと丁寧に分かりやすく、飾らない人柄そのままに話してくださいました。

‘国を二分’した‘政治の季節’であった安保闘争時代の若かりし頃を思い返しながら、日本と世界の未来に希望や可能性を拓く道を見い出していく、小田先生のお話でした。

参加者は、お話しを受けてそれぞれ思うことを出し合いました。

- ・物言わぬ国民をつくってきた教育。
- ・教育のあり方が人とのつながりを断っている社会。
- ・アメリカのイメージ、いつも良いという宣伝。
- ・一人一人が考え、自分がまずイメージすること。
- ・学びながら伝えていくことが大切。
- ・一人一人は軍国主義者ではない日本人。
- ・消費税値上げを「理解する国民」、素直な感情だと思う。
- ・個人の利害ではない判断をする大多数の生き方があり、そこを注視したい。
- ・社会の負に対して無自覚的に加担していないかを、自分が疑問に思うことから始まるのではないか。

2013 年 10 月 11 日

フクシマ被災地視察・支援のバス



会津おきあがり小法師

10月5日に‘原発をなくす前橋連絡会’主催の『フクシマ被災地支援・視察』のバスに劇団員一名が参加しました。

‘原発をなくす前橋連絡会’は、被災地へ届ける「ワンコイン・お米ひとにぎり届けよう運動」を行ったり、毎週金曜日には前橋駅北口で非核署名に取り組んでいるそうです。

早朝6時に出発するバスの中は県内各地から集まった人たち50名近く、補助席を足して乗り込みました。

ガイドをしてくれたのは福島県いわき市から自主避難中の丹治幹夫・杉江夫妻です。

幹夫さんは『福島ビデオ』というワープロ修理の専門技師、杉江さんはフクシマ被災者として福島の実状を伝える講演など、精力的に活動をされています。

バスは午前9時30分ごろ東北道二本松インターを下り、川俣町から一般道に下り、福島県内を走りました。

一般道を走るバスの中の放射線測定器は、0.17～0.7マイクロシーベルト($\mu\text{Sv/h}$)を打ちだします。

群馬県前橋市の市街地の放射線量は0.03 $\mu\text{Sv/h}$ 位ですから5、6倍～20倍以上の高い数値です。

車中で最高1.2 $\mu\text{Sv/h}$ になった瞬間もありました。

地上2.5メートル付近の大型バスの中でその数値ですから、外の地表はかなり高いのだと思います。

福島県内のあちこちで4～10 $\mu\text{Sv/h}$ になるところは依然としてあるのだそうです。



(バスの中から撮影)

米の名産地でもある町村に入ると、作付けされない棚田には雑草が生い茂っていました。

一面耕されたような黒土がみえる田畑もあるのですが、畑の一区画に盛り土があり、ブルーシートがかけられていたり、黒い化学繊維袋に入れられた袋がいくつも置かれています。

それは表土を削る除染作業をした後の光景でした。

同じ場所の一区画に汚染土を保管している、『除染』とは名ばかりの実態です。

それを持っていく場所さえ見通しが立っていないのです。

昼間の時間しか入れない居住制限区域の町は無人のまま、大地震で倒壊した家屋もそのままに廃墟となっています。

管理区域に入るには許可が必要で、この視察支援では団体バスとして役所に申請を出し、許可を得たのだそうです。

一般人が滞在できる時間帯は決まっていて、それ以外の時間に侵入しているのが見つかり一人につき罰則金10万円が科せられるのだそうです。管理区域のところどころにパトカーが停まり、取り締まっていました。

南相馬市の日本共産党ボランティアセンターへ支援物資のお米とカンパを届け、センターの方に案内していただきながら、海岸線の方福島第一原発周辺まで向かいました。



請戸(うけど)地域は津波被害の大きかった沿岸部で、一面草原のように生い茂ったセイタカアワダチ草の中に小型漁船やつぶれた自動車、流された家屋、ガレキがあちこちに点在していました。

朝からあいにくの雨模様だったのですが、傘や合羽をかぶりながらそれぞれバスを降り立ちました。



両側にガレキが積まれている歪んだ道路を歩いていると、無力感に襲われながら呆然とするしかありませんでした。



宮城県、岩手県では災害支援が民間からも多く入り、全国からボランティア支援に参加した学生や社会人も多いと思います。

けれど福島県内の実態は、いまだに手のつけられない地域が広範囲にわたって存在し、暮らしのすべを奪われたまま仮設住宅で暮らしている人々が大勢いるということを、この視察で改めて知りました。

県外へ避難・移住した人も‘ふくしまもん’というだけで大人から子どもまで心無い中傷をうける差別の実態もあるのだそうです。

大震災、津波、放射能汚染、いわれぬ差別、果てしない苦しみを受けている人々と地域があるということを忘れてはいけないと思いました。

ボランティアセンターでお会いしたスーパー店経営の男性は原発損害賠償原告団団長として、「生業(なりわい)を返せ！地域をかえせ！」のスローガンを掲げ、東電と国を相手に集団訴訟を起こし、今年7月から公判が始まっているとのことでした。

生活再建さえままならず、必死に復旧しようとしているところへ訴訟を起こすことに、地域の仲間から白い目でみられることもあるのだそうです。

次の世代の子どもたちが生活基盤を漁業の町で再び築くことができるように、集団訴訟裁判を闘い続ける覚悟ですと話してくださいました。

被災地の各地で、また避難先の地で、同じように完全賠償を求める集団訴訟の動きが広がっているとのことでした。

原子力発電所を再稼働させ、原子炉設計技術を後発国に輸出しようとする日本政府。

原発事故の放射能汚染は、人々のくらしと相容れない災厄しかもたらさないということを、日本中の市民が知っていなければならないと、強く感じました。

犠牲の上に成り立つ「豊かさ」は偽物で、もろいものです。

‘原発をなくす前橋連絡会’事務局／前橋民商内

TEL 027-224-2936

2013 年 12 月 22 日

「カエルの豆太」を島根県で上演しました

12月9日、10日に「カエルの豆太」の公演依頼を受けて、島根県の松江と出雲へ旅公演にでかけてきました。山陰地方は「ちびすけうさぎのカルロス・ロサーノ」公演以来14年ぶりの再訪です。

群馬から出発してひたすら西へ西へ、途中琵琶湖畔の彦根で一泊中継しながら、出雲市に到着。

会場となるひまわり第二保育園を目指すと、住所通りの場所には保育園らしき建物がみつからない！

あれれ？と周辺を探すうちに親切な地元の男性が道案内をしてくれたおかげで、やっと保育園へたどり着くことが出来ました。

新築移転したため、地図にもGPSにもまだ載っていなかったのです。

木造新築の園舎は木目もきれいに輝き、とても居心地のいい空間です。団員たちは早速‘仕込み’にとりかかり、保育園ホールの大さにちょうどよく舞台がセットできました。

翌日は市内の各地からこどもと保育士さんたちが大勢集まってくれて、会場は賑やかになりました。

こどもたちはよく笑い、劇中のことばに反応しながら楽しそうに見てくれるのです。

劇中歌が聞こえてくると、みんなで一緒に歌ってくれます。

こうなると出演者は百人力を得たようで、心がほくほくしてうれしくなります。

最後までしっかり見てくれたこどもたちと歌を合唱しながら、出雲での舞台を無事上演することができました。

翌日は見事な石垣に囲まれた松江城の城下町に宿泊しながら、公演会場となる矢田市の体育館に午後から舞台準備に入りました。

小学校体育館の数倍の広さがある、とても広い舞台空間でした。また、夜の開演時間ということで日中に上演することの多い体育館公演とは違う感覚を伴う本番でした。

実行委員の保育士さんたちはお揃いのウェアを着て、この日の為に丁寧に準備を重ねてこられたようです。

この日も大勢のこどもたちと保育士さんが「カエルの豆太」をあたたく迎えてくれました。

土地柄なのか、普段関東地方で活動している私たちには、出雲や松江でのこどもたちの様子は、素直で人懐こくて明るさがあると感じます。つまり、こもらしいということかも知れませんが、そういうことをとても新鮮に感じました。

劇中のことばに耳をかたむける集中力や、呼応する声、劇が終わった後も俳優たちを役柄に重ねて、芝居の続きのように話しかけてくるこどもたちは、日常の中で大人との信頼関係をしっかり育んでいるからこそ、こどもがこもらしくあるのだろうと感じさせられます。

経費の負担が大きくなってしまいう遠距離公演にもかかわらず、こどもたちのために演劇をみせる機会をつくろうと、遥々美しい山陰の地から群馬中芸を呼んでくださった保育園のみなさんに感謝しています。

お世話になりました保育園のみなさん、そして元気なこどもたちに心よりお礼を申し上げます。

貴重な機会をいただき、ありがとうございました。



出雲ひまわり第二保育園での様子



矢田体育館で上演中

この一年間は、舞台「カエルの豆太」を通して全国の保育園・幼稚園のみなさんにお会いし、そして、その度に私たち劇団の方が励まされることの多い一年でした。

保育制度も変えられようとする中、日本政府が12月6日に強行成立させた‘特定秘密保護法’に国民の不安や怒り、一方で諦めや無関心が広がる世の中ですが、こどもを信頼する力のある保育園・幼稚園から巣立っていくこどもたちが、安心して豊かな人間性を形成していくことのできる社会であることを願い求めます。

劇団に出来ることは些細なことです、これからみなさんと共に歩み続けてゆく次第です。

◆お世話になった保育園

[12／9出雲市公演]

ひまわり第二保育園・神門保育園・ひまわり第一保育園・おおつ保育園

こぐま保育園・大田こぼと保育園・神門第二保育園・古志ひまわり保育園

[12／10松江市公演]

こぼと保育園・あゆみ保育園・たけかや保育園

わかたけ保育園・虹の子保育園

2013 年 12 月 23 日

冬のこども劇場「ゆめみこぞう」

12月13日～15日の三日間あかぎ未来スタジオで冬のこども劇場「ゆめみこぞう」を上演しました。

すっかり冬支度の赤城山は空気が澄んで気温は低いのですが、天気にはかろうじて恵まれて、劇場には大勢の人々が足を運んでくださいました。

公演の様子をどうぞご覧ください。



お正月の夢買いの場



吾助と上、下の大尽の場

公演初日は平日の金曜日でしたが、時間の合間をぬって劇場へ駆けつけてくださる方が何人もいらっしゃいました。その中には、「ゆめみこぞう」の音楽を作曲してくださった中村忍先生もいらっしゃいました。そして、熊谷市のわらしべの里共同保育所のこどもたちが一番前で横並びに座って楽しそうに、最後までしっかりみてくれていました。



大尽の娘たちの婿とり合戦の場



おしまい合唱



公演二日目、三日目は、前橋利根川教室や館林しぜん教育研究学園の学童のこどもたちや、劇団員の友人知人、常連のみなさんが来場してくださいました。

そして今回も桶川市のいなほ保育園父母のみなさんが食堂や売店を開きながら、観客にもなっていただきました。

午前中から食堂の準備のために劇場へ到着するお母さんたちにお会いすると、心からありがたいことだと感じては、いつも同じ言葉しか出ないのですが、未来スタジオの勝手をすっかり心得ていらっしゃるので安心しておまかせしてしまいます。一緒にこども劇場の場をつくってくださるありがたいみなさん方です。

ロビーでは、福島県いわき市から前橋市へ自主避難された丹治杉江さんから貴重な資料をお借りして、原発事故関連の資料を展示するコーナーをつくりました。

二年九ヶ月前の震災と原発事故は収束していないことを改めて感じさせられ、じっと資料パネルに見入る人もいました。

この12月は連日の公演や移動日程が詰まっていたため、このゆめみこぞう公演までが大きな山場でしたが、

おかげさまでにぎわいの中、ゆめみこぞう公演を終了することができました。

みなさんからは、河童が印象的で可愛かった、どこかで聞いたことがあるはなしだった、面白かった、などの感想を聞くことが出来ました。

面白いと感じてもらえたのはよかったが、ドラマのプロットを丁寧にたどり、俳優それぞれが登場人物の内面を捉えきれていたか、それがお客さんに伝わっていたか、声を荒げるばかりではなかったかなど、公演後にみなで確認しました。

また今後に生かしてゆきたいと思います。

このたびも、多くのみなさんにあかぎ未来スタジオへおいでいただきありがとうございました！

この場を借りて御礼申し上げます。

2013 年 12 月 29 日

2013年の仕事納め

今年最後の舞台は、県内東部地域の学童クラブ交流会がゆめみこぞうを呼んでくれました。

12月26日伊勢崎市境総合文化センターの大ホールに冬休み中の子どもたちがたくさん集まってくれました。

冒頭、歌いながら登場する俳優たちの恰好や動きが子どもたちには物珍しかったようで、賑やかな笑い声が会場中に響き、ものがたりの世界へ誘い込む力が最初から試されました。

着ぐるみ人形を被ったり、声をマイクでひろってスピーカーから響かせる手法は使わないので、俳優の生の声がどれだけ観客に無理なく届くかが、ホール公演の場合は一番神経を使うところです。

なにやらステージの上で大人たちがおかしい動きをしたり何か喋っているぞというふうに、ものがたりが進むに連れてざわめきは落ち着いていきました。



子どもたちには少しむずかしいことばや聞き慣れない方言や、説明が多かったかも知れませんが、それでも気になるところは見入りながら、婿とり合戦のひっぱりっこのところでは音楽に合わせて手拍子を打ってくれたりしながら最後まで観てくれました。



劇が終わった後は指導員さんが各地区からあつまった子どもたちを順々にホールから退出させて、ゆめみこぞうの本番は無事終了しました。

会館施設での上演は慣れないことが多く、緊張を強いられますが、会館担当の方がとても親切で協力的だったおかげで、最後まで滞ることなくすすめることが出来ました。

忙しい年の瀬にお正月の「ゆめみ」のお話しは時節に合う演目でした。

昔の人たちの暮らしや風習が少しでも子どもたちに伝わり、また演劇を楽しむきっかけになればと願います。

東毛地区学童クラブ交流会のみなさんありがとうございました。

今年一年無事終えることが出来て、何はともあれよかったと思います。

2013年は創立から51年目でした。

五月には創立50周年の集いを開き、大勢の人々が関わってきたという半世紀分のひとの記憶が劇団の財産となって蓄積されていることを再確認しました。

演劇を含めた文化環境は厳しく、また政府の強硬姿勢に国民の負担ばかりが押し付けられる体制や税法が年末の国会で一挙に決まってしまうという状況が作られました。

おかしいと思うことには意思表示をしなければ、ただ受け入れるだけになることを痛感し、反面いくら声をあげても権力者は国民の方を向いていないことに憤った一年でもありました。

新しい年が国民・市民・私たちにとっての善きことが、すこしでも多くあることを願いながら、舞台を通じてみなさんとともに歩んでゆきたいと思います。

どうぞよいお年をお迎えください。

今年一年ありがとうございました。

2013年 12月末日

劇団群馬中芸